

# コレット『青い麦』に生じる 性分担の逆転

—自然物を手がかりに

---

山田志生 博士課程前期 2 年

## 0、はじめに

それまで通俗的な作家として扱われていたシドニー＝ガブリエル・コレットが、1920年に発表した『シェリ』によって彼女特有の感性や文体が認められ、文壇の仲間入りを果たしたことは広く知られている。アンドレ・ジッドは『シェリ』の老年の元娼婦と青年の恋愛関係の中に「素晴らしい主題」を見出したのだ。そこで、若い新婚夫婦と飼い猫の三角関係の物語とみなされてきた『牝猫』を、純粹か否かの視点で人間を考察することを提起することによって異なる読解が可能になったように、他のコレット作品の中にも、より人間の本質をみることができるのではないだろうか。

たとえば『青い麦』<sup>1)</sup>は、フィリップ、ヴァンカ、ダルレー夫人の三角関係をもとに展開する、一種のアバンチュール小説としてみなされてきた。読者はこの小説を〈快楽を与える者〉と、その手ほどきによって〈性に目覚める思春期の人間たち〉の物語という枠組みに当てはめて解釈してきたのだ。たしかに年頃の青年の性に対する好奇心や、その若い身体の持ち主を誘惑する年上の女性、そして無垢で活発な娘という筋は刺激的である。しかし、あまりに物語中の関係性、すなわちシチュエーションの過激性ばかりに焦点が当てられているせいで、コレットが文中に差し込んだ描写や人物の動作が無視されているように思われるのだ。そのことは映画から顕著に読み取ることができる。

『青い麦』は1954年にクロード＝オータン・ララ監督によって映画化されている。その内容は、ダルレー夫人とフィルの接触を中心に据えていて、ふたりの間で交わされる行為や台詞は多少の変更はあるものの、概ね原作に沿う形で展開される。ところがフィルとヴァンカの関係においては、彼らの行動や会話は大幅に省略され、変更されてしまう。つまりクロード＝オータン・ララは、まさに年上の女性ダルレー夫人と青年フィルのひと夏の情事を『青い麦』の主題と考え、それによって相手の女性と、一足先におとなになってしまった幼馴染みに嫉妬する存在としてヴァンカを捉えているのだ。

しかしコレットは、小説の中に非常に細かく人物たち、特に若いふたり

の動作を描写し、映画に登場しない植物や生き物まで詳しく書き込んでいる。それらは、幼少期からよく知っているはずのフィルとヴァンカが互いを異性として意識しはじめ、ふたりの関係が微妙に変化していく様子や、年上の女性ダルレー夫人の介入による物語の複雑化を示すのに効果的な役割を果たしている。映画が映像の視覚化によって多くの描写を単純化してしまった一方で、小説はより緻密で豊富な情報を与えてくれるように思われる。

またダルレー夫人は、映画の中でいかにも主要人物としてクローズアップされるが、小説では実際に彼女が登場する回数は意外にも少ない。具体的に挙げるならば、全17章のうち、4章の出会いの場面、8章の関係を持つ場面、9章で追い払われる場面、10章の再訪の場面、そして14章の最後の密会となる場面である。それ以外のダルレー夫人の存在は、フィルが持っている色や匂いに対する感覚によって行われる回想であり、自然界の動植物たちが喚起するイメージなのだ。そこで本稿では、物語のプロットから離れた部分、すなわち小説の中で自然物が使われる描写、人物の動作、比喩表現に着目しながら、『青い麦』の再読を試みる次第である。

## 1、自然描写について

### (1) 区分される領域

『青い麦』には膨大な数の生き物の名称が盛り込まれている。たとえば、主人公のヴァンカという名前は〈ツルニチニチソウ pervenche〉という意味を持っていて、さらに彼女の瞳はツルニチニチソウと同じように青い。その青さは〈春の雨〉などにも喩えられ、繰り返し強調されている。さらに、自然界の生物は各章の題名にも用いられる。1章には「エビ crevette」が、9章には「アザミ les chardons」という題名が付けられている。〈アザミ chardon〉もまた、ヴァンカの瞳に喩えられるのだが、別の場面ではダルレー夫人への贈り物としても登場する。そして、偶然出くわしたフィルとダルレー夫人の会話のきっかけとなる〈ヒバマタ海藻 goémon<sup>2)</sup>〉などの珍しいものまで挙げられている。

たしかにコレットは、自然を愛した母シドの影響を大きく受けたことで有名であるし、実際に多くの作品にさまざまな種類の動植物を書き込み、自然の様子を詳細に描いてきた。しかしここでは自然を、作品を装飾するための単なる風景描写としてみなすのではなく、自然と人間とを区別するような描写があることに着目したい。

八月の大潮が雨を運び、窓を満たしていた。大地はそこで、砂まみれの野原の境界で終わっている。もしまた風が吹いたら、あるいはもしまた平行の泡が耕された灰色の畑のような海を持ちあげたら、家はおそらくノアの箱舟のように漂うことになるだろう。しかしフィルとヴァンカは、八月の潮が単調な轟音であること、九月の潮が白く乱れた髪のようなものであることを知っていた。それに草地の限界が乗り越えられないままであることもわかっていて。幼少時代の彼らは、毎年、人間界にむしばまれた縁で、無力に、石鹸のように泡立って踊っているだけの細長い帯のような波に平然と立ち向かっていた。<sup>3)</sup>

これは、フィルとヴァンカが自然の習慣、あるいは自然の掟のようなものを経験によって熟知していることを示すと同時に、読者に海（自然）と陸（人間）の境界を意識させる。八月の大潮の時期には自然の領域が拡大し、まるで自然が人間の住む土地を襲いにやってくるようなのである。そんな光景を、ふたりは人間の領土から見張っているのだ。

また、このような描写は、ふたりが家族と一緒に毎年訪れる別荘を具体的にイメージさせるだけでなく、幻想的に描くことによって、パリでの日常生活との違いを感じさせる。この物語の舞台となる避暑地が、まるで現実から切り離された異世界空間であるかのような感覚を与えてくれるのではないだろうか。

## (2) 自然に溶け込むヴァンカ

ところで、前項で指摘した八月の大潮が襲ってきた日は、外は嵐である。フィルは遊び道具を片付けに別荘から出るのだが、ほんの僅かな時間

で戻って来てしまう。すると彼は、まるで自然風景の一部を眺めるようにヴァンカを見ることになる。

窓の向こう側で、ツルニチニチソウの瞳が彼を追いかけていた。窓ガラスを縦に流れるしずくは、不安そうなその瞳から止めどなく流れているようにみえる。その瞳の青さは、空の碧玉のような波形模様の錫色にも、海の緑青に覆われた鉛の色にも、溶け込んではいなかった。<sup>4)</sup>

フィルは窓ガラスを伝う雨を、ヴァンカの涙として捉えている。その光景は、まるで自然とヴァンカが一体化しているかのようである。さらに彼女の瞳の青さは、空や海の色と比較される。その青さは、他のふたつに劣りはしないものの、〈瞳〉〈空〉〈海〉が比較対象として同列に並べられていることは明確である。自然がヴァンカの一部となり、ヴァンカもまた、自然の一部となるのである。

さらに再びフィルが窓の方を向くと、今度は「長く滴る涙のような雨」と「しおれたマルバアサガオの渦を巻いた花びら」<sup>5)</sup>のあいだに、15歳とは思えないような女の顔をしたヴァンカを見つける。そのあとすぐに雨は上がり、光が差し込んでくるのだが、その様子を喜ぶフィルは以下のようなのである。

フィルの心は、この休戦をよろこんで迎えた。苦しめられている16歳のフィルは、ありのままに恩恵や休息を求めているのだ。<sup>6)</sup>

また、3章「待つこと En attendant」のフィルとヴァンカが軽く言い合う場面では、ここでもある対立がうかがえる。フィルはヴァンカのことを〈君たち、女ってやつは…〉と心の中で呟き、ヴァンカ自身も〈わたしたち、女は〉と言う。そしてフィルのことを〈あなたたち、男って…!〉と指摘することからわかるように、ふたりの会話は男と女をはっきりと別のカテゴリーとして認識している。

しばらく続いたふたりの会話が途切れると、フィルはこれを〈傷つきや

すい束の間の休戦 *une trêve passagère de susceptibilité*〉と呼んでいる。その時のヴァンカはというと、次の引用からわかるように、何も言わない。

彼女はもの悲しく微笑んだ。さまようような微笑みは静かな海と、強い風が雲をシダの形に描いている空に訴えかけていた。<sup>7)</sup>

ヴァンカの表情は、フィルではなく海と空に向けられている。海の静けさと風の強さは、表には表れないが複雑で激しいヴァンカの心情を代弁しているかのようだ。このとき、〈*trêve*〉という語は自然と人間の対立だけでなく、フィル（男）とヴァンカ（女）の対立をも示しており、さらにはヴァンカは自然の側に描かれているように思われる。雨の中に佇むヴァンカの瞳や表情が自然と同化していることから、自然と人間の対立が生じるときには、ヴァンカはより自然に近い存在として描かれているのではないだろうか。

## 2、変化するヴァンカへのイメージ

### (1) 双子として

1章「エビ *crevette*」の冒頭では、フィルはヴァンカが気付かないうちに、少し離れた場所から彼女の身体を見つめる。体のパーツや表情を詳細に観察し、「今年のヴァンカ」と「ここ数年のヴァンカ」が異なることを感じ取るのだ。ところが、自分の抱く違和感が、彼女の身体が女性へと成長していることによるものだとは気づいていない。それは彼女のことを「小さな男の子みたいだ」と形容していることや、以下の説明から読み取ることができる。

フィリップの人生は常に、心の恋人であるヴァンカのものだった。  
(略) そっくりな弟のような、双子のような彼女に結び付いていた。<sup>8)</sup>

フィルはヴァンカのことを双子の妹のように思っている。このことは、彼

女を幼少期からの友として大切に扱うと同時に、自分の分身、すなわち自分と瓜二つな存在として捉えているのだ。そのせいで、自分とは異なる性というものの認識がなされないのではないだろうか。

しかし、彼の中に欲望が存在しないというわけではない。それは同じ1章の中で、エビを捕ろうとしたヴァンカが、フィルの傍でかがみこんだ時にあらわれる。

彼女がいっそう身をかがめると、閉じ込められて飛べない鳥の翼みたい彼女の髪が、友人の頬を打った。(略)彼は気付かなかったようだが、あいている手で塩気を帯びて日に焼けたむき出しのヴァンカの腕を引き寄せた。<sup>9)</sup>

するとヴァンカの腕は自由になろうとして、フィルの手をプレスレットのように手首まで滑らせる。エビの動きをよく追おうとして再びその腕は、彼の手の中を動き肘にもどる。この動きをコレットは「プレスレットのように」と繰り返す。

エビを捕り損ねた。それはおそらく、彼が手の中の従順で動かない腕や、一瞬負けたように彼の肩にもたれかかり、そして気難しく離れていった髪と頭の重さを味わっていたからだ。<sup>10)</sup>

彼自身はこの身体への興味が欲望であると自覚してはいないが、読者にはフィルの中に欲望が存在していることが明かされるのだ。

## (2) 自覚される欲望

ところが、2章「ヴァンカ Vinca」でフィルに新たな見方を与える決定的な機会が訪れる。ふたりがいつものように海水浴をしていたある日、昼食に両親の友人がパリからやって来るといふ。来客のために、普段よりもきちんとした「それなりの格好」をしたヴァンカを目の当たりにしたフィルは心の中で以下のようにつぶやく。

〈なんだ、あれは〉フィリップは声に出さずに毒づいた。〈まったく、どうしたんだ、あいつは？サルがおめかしして〉<sup>11)</sup>

ヴァンカは、白いオーガンジーのフリルのついたワンピースという、いかにも女性らしい服装をしている。さらには、「南の島タヒチの日曜日だよ、こんなに野暮ったいあいつは見たことない」<sup>12)</sup> と心の中でつぶやいていることから、普段よりも女性性を強調する格好をしたヴァンカは、フィルの目には滑稽なものとして映るのである。

ところが来客が、ヴァンカの美しさをギリシャのタナグラ人形に喩えて褒め、またその来客の誉め言葉や冗談にすっかり対等に、まったく動じずに対応するヴァンカをみたフィルは、先ほどとは正反対に感じるようになる。

《おれが間違っていたのか。彼女はすごく美しい。初めて知ったよ！》<sup>13)</sup>

このように他者の視点をきっかけに、フィルは自身のうちに無意識に存在していた欲望に気付く。そして、〈彼らの幼少時代はふたりを一つにしていたが、思春期が彼らを引き離してしまった〉<sup>14)</sup> ことに気付き、これまで自分の分身のように感じていたヴァンカという存在への新たな認識が行われるのである。

### 3、イメージによる喚起

#### (1) 血のイメージ

この作品の中で血は、章を横断してさまざまな形で登場し、作中人物たちに影響を与える。

##### ①ある種の女らしさ

ヴァンカの瞳にも喩えられる青い〈アザミ〉は、ごちそうになったオレ



ンジエードのお礼として、フィルからダルレー夫人に贈られる。しかし、フィルはうしろめたさから、直接ではなく塀から彼女の屋敷の中にそのアザミの花束を投げ込むことを選ぶのだが、そのせいでアザミの鋼のような葉は、ダルレー夫人の頬に傷を作ってしまう。その傷は、章の最後でフィルが追い返される場面、ある印象を与える。

「わたしはね、物乞いと飢えた人しか好きじゃないの。ムッシュー・フィル。もしまた戻ってくるなら、今度は救いの手を求めてくることね…行って、行ってちょうだい、ムッシュー・フィル！」(略) 追い立てられ、追放された彼であったが、男の誇りだけは持ち帰っていた。そして記憶の中には、鉄柵の黒い唐草模様がスイカズラの枝のように囲っていて、頬の上にみずみずしい血の傷跡を彫りつけた、あの女らしい顔があった。<sup>15)</sup>

ダルレー夫人の頬に〈tatoué〉された血の傷跡は、フィルの記憶に、女性のある時の姿として刻み込まれる。フィルとダルレー夫人が初めて出逢い、言葉を交わした時に、彼は突然、疲れを感じて落ち込み、衰弱してしまう。そして、〈女性の前に出た青年を捕らえる、あの女性的な発作〉によって麻痺したように感じる<sup>16)</sup>のだが、これは血のイメージを伴う女性の力強さを予感したのではないだろうか。

## ②身体における境界

フィルとヴァンカのふたりには、いつものように海辺で遊ぶことができない日がある。彼は、わざわざその日を選んでダルレー夫人にアザミの花束を渡しに行くのだが、そんな日のヴァンカの様子は普段とは異なっている。

フィルは16歳の洞察力で待っていた。疲れて、少し気分が悪そうに、活気がなく、怒りっぽい様子で、青い目の下に薄紫色のクマを作ったヴァンカが木陰に横たわって、泳ぐことも散歩することも断る

日を。<sup>17)</sup>

ヴァンカに生じるこの現象は、身体において、子どもとおとなを隔てる一種の境界である。したがって、この身体にあらわれた女性性によって、ヴァンカがおとなの女性へと成長していることを読み取ることができる。そして〈血〉と〈女〉がフィルの中で、さらに強く結び付けられていくのではないだろうか。

### ③アナゴ

フィルはダルレー夫人と初めて肉体関係を持った日の翌日、ヴァンカと一緒に海岸に出掛ける。そこで小エビやカナガシラを捕まえて遊ぶのだが、ここでフィルはヴァンカの行動から、意外な方向へ想像を膨らませることになる。

ふたりがオマールエビを捕まえると、ヴァンカはアナゴの住む《隙間 quai》を激しくひっかき回した。—ほら、そこにいるのが見えるわ！と彼女は、ばら色の血で染まった鉄製の鉤針の先を見せながら、叫んだ。フィルは青ざめて、目を閉じた。<sup>18)</sup>

アナゴを突き刺すヴァンカを目の当たりにしたフィルは苦痛を感じはじめ、次第に前日のダルレー夫人と過ごした時間への回想に移っていく。性的な行為を経験したことによって（身体的に）一人前の男になったはずのフィルは、アナゴの流す血に震え、苦しむ、虚弱な自分を実感するのである。そして、彼は「息苦しくなるまで空気を吸い込むと、両手で顔を覆い、しゃくりあげて泣きながら声をあげる。<sup>19)</sup>」

そして、一種のヒステリーのような状態に陥るフィルをみたヴァンカは、厳しい態度をとる。

ヴァンカは立ったままで、血で濡れた鉤のついた棒で武装した拷問人

のようだった。(…) その顔からは驚きは消え、年齢というものを少しも持たない、辛辣で悲しそうなしかめっ面の厳しい表情と、軽蔑を、すっかり男性的に、泣いている少年の疑わしい弱さに対して浮かべた。<sup>20)</sup>

そして釣り用の袋と網を拾うと、鉤つきの棒を剣のように腰に差し、一度も振り返ることなくしっかりと足取りで去っていく。その姿は勇ましい印象を与え、まるで女戦士のようなのである。

エビやカニなどの他の生物ではなくアナゴを使うことによって、そこからイメージされる流れ出た〈血〉は、一般的に指摘される〈男らしさ〉と〈女らしさ〉の逆転の構図を示すきっかけとなるのだ。

## (2) 感覚のイメージ

### ①色 の 記憶

8章「洞窟 L'antre」ダルレー夫人の屋敷を訪問したフィルは、直観的に身の危険を感じながらも、彼女に逆らうことができずにオレンジエードを与えられる。彼自身にも理解しえない何かに圧倒されるフィルは、非常に混乱しているが、だんだんと暗さに目が慣れてくると次のようなものを見る。

しかしまぶたを開けると、暗さに慣れた彼の目は、室内装飾の赤と白、カーテンの鈍い黒と金を見分けた。今まで姿を消していたために見えていなかった女性が、かちんと音を立てながら皿を持って行く。赤と青のコンゴウインコが留まり木の上で、扇のような音を立てて羽を広げると、脇の下の興奮した肉の色が見えた…<sup>21)</sup>

そしてダルレー夫人は、コンゴウインコのことを「口がきけないからよりいっそう綺麗」だと言及する。彼は暗闇の中で、わずかな情報を色として認識する。それらの情報は、あとになってダルレー夫人との秘密裏に行われた出来事を想起するきっかけとなり、彼の日常生活を侵食していく。

ガラスの縁のダイヤモンドの光…青白い三本の指の間できらめく四角い氷…留まり木の上の、口をきかない青と赤のコンゴウインコ。その白い羽毛の裏側は桃の果肉のようにばら色で…<sup>22)</sup>

彼の言葉による回想はここで終わるが、コンゴウインコの脇は共通して〈chair〉という語で表現される。このことからフィルの回想が、出来事から徐々にダルレー夫人の身体の一部、おそらくより性的な意味を持つ箇所へ集中していくことがわかる。

また、コンゴウインコの赤と青という色が、直前のアザミによる出血の赤と、ツルニチニチソウの青を象徴すると考えるとき、ヴァンカとダルレー夫人が互いの領域に侵入し合っているように思われる。さらに、口がきけず、籠に閉じ込められたコンゴウインコは、抵抗することも屋敷から逃げることもできない、無力なフィルと重ねることができるのではないだろうか。

## ②麻痺する感覚

フィルは8章での出来事を色だけでなく、別の感覚の記憶としても想起する。たとえばオレンジードについては、初めて飲んだときには、喉が締め付けられるように感じて味がわからなかったと言うが、時間が経ってみると、「あんなに苦いオレンジードは飲んだことがない」と感じ始める。まるで一時は麻痺していた味覚がもとに戻ったかのようである。

さらに嗅覚もまた、回想と結びついていることを、以下のフィルの独白が示してくれるだろう。

あの訪問には、快楽はなにひとつなかった。鉢で焚かれていた香りさえ、一瞬、食欲を麻痺させるし、神経質な錯乱を起こさせる。<sup>23)</sup>

このように訪問の記憶は、快楽の艶めかしい、あるいは達成感に溢れた想い出としてではなく、いわばトラウマのように彼の精神を動揺させてしま

う。フィルにとってダルレー夫人のような〈強い女性〉と対峙することは、五感の感覚を失い、自分自身をコントロールできなくなるきっかけを生み出してしまうのだ。

### (3) 逆転の暗示

アナゴは、ヴァンカに突き刺されるものとして役割を担っていたが、この小説の最後の章にアナゴを暗示させるような表現が再び用いられる。フィルとヴァンカはついに肉体関係を結ぶが、眠りから覚めたフィルは、ヴァンカは今頃傷つき、泣いているに違いないと思い込む。そして、ヴァンカを励まそうと以下のように決心する。

《彼女にこう言おう。「きみも思うだろう。僕たちの愛は、フィルとヴァンカの愛は、あんな藁屑でとげとげした打たれたソバの実の上に横たわってじゃない、別の所で達成されるって。(略) 僕でさえよく知らないあの女は、僕にとても重大な享楽を与えてくれた。彼女から離れたいまでも、生きたウナギからもぎ取った心臓のように、僕の心はその享楽に対して動悸を打つんだ。》<sup>24)</sup>

アナゴとウナギは、生物の名称は異なるものの、その形状や人に与えるイメージは非常によく似ている。男性である自分をウナギに喩えることで、男女に対する一般的イメージを覆しているように思われる。さらに、フィルはヴァンカを気遣っているにも関わらず、当の彼女はいつもと変わらずに日課をこなし、微笑みながら習慣の歌を歌う。このようなフィルとヴァンカの態度は、男女の性の分担の逆転と考えられるのではないだろうか。

### 3、おわりに

コレットの詳細に自然を用いる描写は、読者に物語全体の装飾として優雅さや豊かさを与えてくれる。しかしそれと同時に、いくらかのモチーフは人物や行動とよく結びついてもいる。人物たちが言葉では言い表しはし

ないものの、無意識のうちに感じる心の動きを代弁するのだ。

本稿で扱ったモチーフは作品の一部であるが、これらのことを考慮するとき、この物語においてフィルとヴァンカの関係は、これまで読まれてきたような〈性に目覚める青年と聖性を奪われる少女〉という構図とは異なるのではないだろうか。フィルは男のような力強い女たちを前にする時には圧倒され、錯乱し、虚弱になる。そして、一方のヴァンカの快樂にもひるまない強さは、快樂の経験によって開かれたものではなく、本来彼女が自身の中に持ち合わせていたものと言えるのではないだろうか。また、このような男女の逆転とも捉えられるような解釈は、コレット作品のさらなる読解に役立つ重要な手がかりといえるだろう。

#### 注

本稿における『青い麦』のテキストは、1984年から2001年にかけて刊行されたプレイヤッド版の第二巻に収録される *le blé en herbe* を使用した。邦訳については、河野万里子訳（光文社、2010年）と手塚伸一訳（コレット全集）を参照しつつ、筆者が作成した。

- 1) 『青い麦』は1923年7月に出版された小説であるが、全ページのうちおよそ半分にあたる1章から15章は断章の形をとっている。というのもこの物語は、1922年7月から1923年3月にかけて『ル・マタン』紙に週一回の連載として書かれたもので、掲載時は各章にそれぞれに題名も付けられていた。のちにそれらの物語をまとめ、大幅な加筆を加えたものが現在の『青い麦』である。検閲の圧力によって物語の途中で連載は中止されるが、それ以降は形式の義務や過激な展開への制限から解放されたために、流れを断ち切ることなく書かれているといわれている。
- 2) フィルとダルレー夫人が互いに名乗るきっかけとなったのが、この〈ゴエモン〉である。運転手を連れて車に乗った彼女は、偶然出会ったフィルに道を尋ねる。彼はそこがゴエモン（ヒバマタ海藻）を採ることができる道だと説明するが、その植物を知らない彼女は「ゴエモン」という名の道だと勘違いするのである。そこには、避暑地を知り尽くしたフィルと、都会からやってきたダルレー夫人の対比を強調している。
- 3) *Œuvres*2/édition publiée sous la direction de Claude Pichois, 1984-2001, p1199

- 4) *Ibid.*p1199
- 5) *Ibid.*p1200
- 6) “
- 7) *Ibid.*p1192
- 8) *Ibid.*p1215
- 9) *Ibid.*p1187
- 10) *Ibid.*p1188
- 11) *Ibid.*p1189
- 12) “
- 13) *Ibid.*p1190
- 14)
- 15) *Ibid.*p1218
- 16) *Ibid.*p1197
- 17) *Ibid.*p1216
- 18) *Ibid.*1228
- 19) “
- 20) “
- 21) *Ibid.*p1213
- 22) *Ibid.*p1215
- 23) “
- 24) *Ibid.*p1269

#### 参考文献

クロード・オータン＝ララ／共同ジャン・オーランシュ、1953『青い麦』、  
創美企画

コレット『青い麦』河野万里子訳、2010、光文社  
E・ユング『内なる異性』笠原嘉／吉本千鶴子訳、1976、海鳴社  
ハーバート・ロットマン『コレット』工藤庸子訳、1992、中央公論社  
小野ゆり子『娘と女の間』、1988、中央大学出版部  
Joel July, *Les gestes androgynes de l'enfant chez Colette*, Les amis de Colette  
Martine Charreyre, *Théâtraliser l'écriture romanesque*, l'Herne

